

近世の都市を題材とした環境教育授業開発 —観光資源としての歴史的景観を例に—

金子遥^{*1}・西川雄也^{*2}

Developing Environmental Education Lessons on Early Modern Cities
: Taking Historical Landscapes as Tourism Resources as Example

Haruka KANEKO, Yuya NISHIKAWA

抄録：本研究は、社会課題と教育課題から ESD や環境教育、観光を取りあげた教育の位置付けを明確にした。そして、歴史的景観を観光資源として捉え、伊勢参詣により発展した江戸時代の都市である伊勢を観光資源として活用した授業開発を行った。環境教育の視点から、地域の歴史文化を再評価し、現代的課題や地域資源の持続可能な活用の教材化の可能性を示した。

キーワード：ESD, 社会科, 観光, 近世, 伊勢

I. 研究の背景・目的

1.1 問題の所在

持続可能な社会の構築に向けて、教育が担う役割はますます重くなっている。2015年に国連総会で採択された SDGs (持続可能な開発目標) は、17のゴールと169のターゲットが設定され2030年までに達成が目指されている。その重要性は認識されている一方で、「持続可能な開発目標 (SDGs) 報告2025」では、「軌道に乗っている」または「緩やかに進捗している」とされたターゲットは35%に留まり、実現可能性には疑義が残る。

日本では、それ以前の2002年に「持続可能な開発に関する世界首脳会議」で「持続可能な開発のための教育」(Education for Sustainable Development : ESD) を提唱し、2005年から2014年までの「国連ESDの10年 (DESD)」, 2015年から2019年までの「ESDに関するグローバル・アクション・プログラム (GAP)」, 2020年から2030年における「持続可能な開発のための教育 : SDGs 実現に向けて (ESD for 2030)」として、発展を遂げてきた。ESDについては、SDGsにおいて目標4「質の高い教育をみんなに」のターゲット4-7.に示される一方で、SDGsの17全ての目標の実現に寄与するものであることが第74回国連総会において確認されている。まさに、「ESDGs」と呼んでも遜色ないほどに、密接な関係にある。

現行版の幼稚園教育要領・小学校学習指導要領・中学校学習指導要領・高等学校学習指導要領では、いずれも前文に「持続可能な社会の創り手となることができるようにする」ことが示され、ESDが日本の教育の中でも基盤となる理念であることが読み取れる。人口の過疎過密、都市の交通問題やごみ問題といった現代における様々な社会課題について、ESDが果たす役割は大きいといえるだろう。

1.2 近年の教育における目標設定

こうしたESDの視点も踏まえ、持続可能な社会の担い手を育てる教育の方向性も示されている。OECDは1997年から2003年に行われたDeSeCo (Definition and Selection of Competencies) プロジェクトを基に、知

*1 大阪人間科学大学

*2 京都大学人間・環境学研究科博士後期課程

識・スキル・態度や価値観を包摂したコンピテンシーが持続可能な開発と社会連帯に繋がることを示した。その考えは 2015 年から開始した「Education2030 プロジェクト」でも引き継がれ、2019 年にはウェルビーイングを目的地としたラーニング・コンパスを示し、学習者がより良い未来を描くためのコンピテンシー、及びそのカリキュラムデザインについて示された。そして、2019 年以降は Education2030 プロジェクトの第二フェーズとして、教員のエージェンシー、コンピテンシー、ウェルビーイングの実現、学習環境のデザイン、カリキュラムの実施に焦点があてられる（図1）。

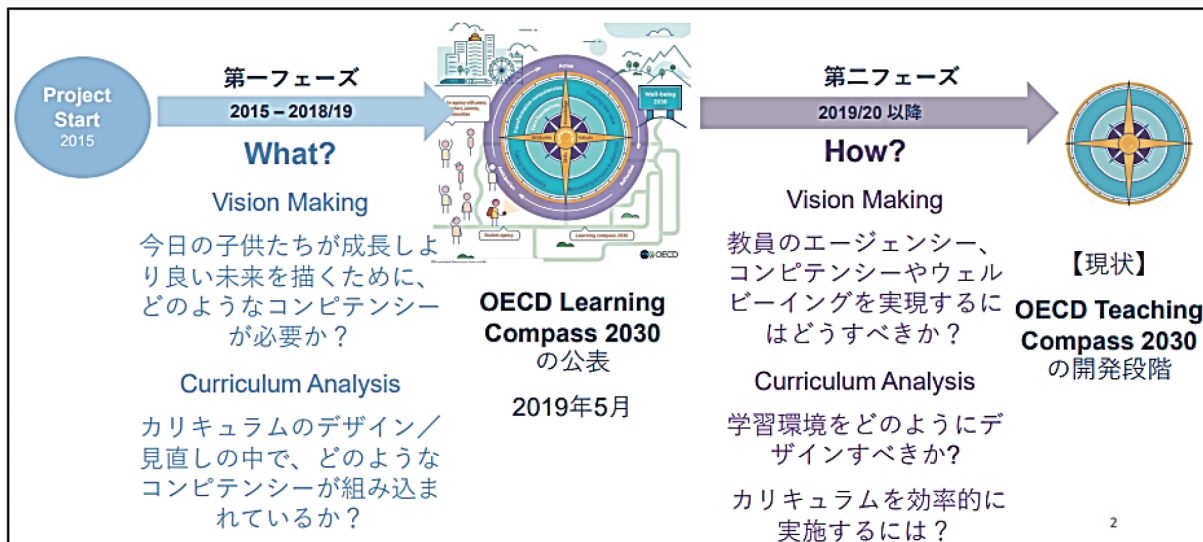


図1 OECD Future of Education and Skills 2030 Project (中央教育審議会2023,p.2)

ラーニング・コンパスを踏まえて、中央教育審議会でもコンピテンシーに対応して「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」として整理された。そして、具体的な授業開発など様々な形で実践されている。さらに、2025年には教員のエージェンシー、コンピテンシー、ウェルビーイングを整理した「OECD Teaching Compass」(図2)が示され、ラーニング・コンパスの理念を授業実践とすることが促進された。

しかし、実際のカリキュラムの方では課題も指摘される。令和7年9月26日の中央教育審議会教育課程部会「社会・地理歴史・公民ワーキング」では、「社会・地理歴史・公民WGに関する現状と検討課題」の中で、以下のような指摘がある。

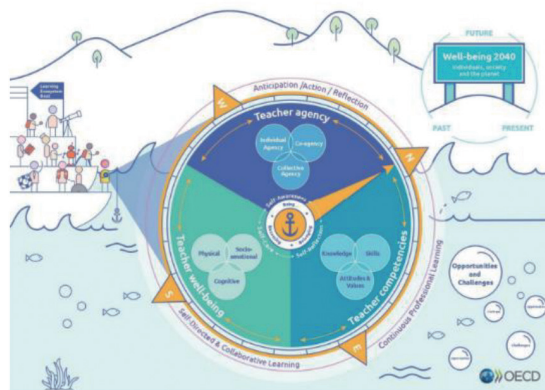


図2 OECD Teaching Compass (OECD2025,p.8)

表1 社会・地理歴史・公民WGで指摘された課題 (下線筆者)

(2) 社会的諸情勢の変化に伴う新たな課題

グローバルな協調や競争に関する課題、地球環境の変化やそれに伴う自然災害、都市・地方間や世代間の不均衡などをはじめとした地域社会の変化等も踏まえた持続可能な社会の形成、生成AIなどデジタル技術の発展などの社会変化に対応した内容の更なる見直しの必要性が高まっている。

(3) 「民主的で持続可能な社会の創り手」の育成に関する課題

児童生徒自身が社会との関わり方を実感しつつ学習を進めることについては不十分であるという課題や、社会参画意識を育成する観点などから、各学校種、各分野、科目の学習が、有機的な関連を持って、効果的に寄与できているかについても課題が指摘されている。

指摘されているのは、近年見られる地域社会の変化等も踏まえた現代社会の課題に繋がる内容として見直すこと、そして社会との関わりを実感しながら学習し、社会参画意識を育成することが挙げられる。それに対して、検討事項として「グローバルな協調や競争に関する課題や自然災害、デジタル技術の発展、人口減少社会がもたらす社会構造の変化など複雑化・多様化が進展する社会の状況を踏まえた内容のあり方」を検討する必要性が示された。例を示せば、これまで経済的な視点から推奨とされてきた観光が、一定の場所に観光客が集中するために起こるオーバーツーリズム問題などが挙げられる。経済的な視点でみるとメリットが大きいが一方で、観光地の急激な発展は、その都市の交通渋滞や環境破壊につながりかねない。まさに、ウェルビーイングに対する大きな課題となっている。

1.3 環境教育の意義

環境教育は、一概に定義することが難しい。時代によって、その時代の社会環境を反映して理解される側面が大きいといえる。「環境教育等による環境保全の取組の促進に関する法律（平成十五年法律第百三十号）」では、「持続可能な社会の構築を目指して、家庭、学校、職場、地域その他のあらゆる場において、環境と社会、経済及び文化とのつながりその他環境の保全についての理解を深めるために行われる環境の保全に関する教育及び学習」と定義される。この定義を踏まえると、環境教育が学習対象とするものは公害や自然保護などの自然環境に限定する事なく、持続可能な社会の構築に繋がる社会問題を広く扱うと捉えられる。

そう考えると、先述したESDの中で、環境教育が担うことのできる役割は大きい。身近な地域資源に光を当てて、教育的意義を見出し教材として活用することへの方途を拓く視点として、環境教育の授業開発は重要な意義を持つ。また、地域資源を教材化することは、地域について考えるだけに留まらない。“Think globally, Act locally.”（環境白書2002）と言われるように、地域の課題とグローバルな課題には共通点も見られる点で、教材化の価値がある。

1.4 観光資源としての歴史・文化的価値

観光における課題は、地域とグローバルに共通する課題のうちの一つだろう。観光は、グローバルにもローカルにも関わる現象である。近年では、国際的なイベントやスポーツ大会などに合わせて、その前後に観光を楽しむ人が増えている。こうしたグローバルな動きは、地域に人を呼び込み、注目を集めるという点で確かに意義がある。メディアにも取り上げられやすく、地域の認知度向上にも繋がる現象といえる。一方、地域固有の文化、風景、食、歴史といった、そこにしかない価値に触れることこそが観光の楽しみとされる。これは、観光におけるローカルな魅力といえる。

こうしたグローバルやローカルな観光は、共通の課題を孕んでいる。大きくは二つ挙げられる。一つは、持続可能性である。季節行事やイベントに合わせて観光客が来る場合、宿泊施設や交通網といった観光客にとってのインフラ整備が欠かせない。しかし、繁忙期と閑散期が起こるため、経済的な偏りや人材確保の難しさが観光地に残る。オーバーツーリズム問題は、世界の中でも報告される課題の一つといえる。二つは、地域住民との共生である。観光客の増加に伴う交通量の増大やごみ問題といった課題は、住民の生活に影響を与えることが多い。観光客へのマナー啓発がインバウンド観光をターゲットにすればするほど難しくなり、グローバルな課題解決では観光地を限定すること、ローカルな課題解決ではその地域の観光客数に制限をかける（または金額を上げることで抑制する）ことになる。つまり、オーバーツーリズム問題等に対して環境負荷を踏まえ、資源や文化を守りながら観光を継続するための人材確保も含めた制度設計が必要となっている。

こうしたことから、現代的な観光は上述のオーバーツーリズム問題等に対して地域への配慮、持続可能性といった課題が残る分野である。近年は、観光庁・UNWTO駐日事務所（2020）から「日本版持続可能な観光ガイドライン（JSTS-D）」が出されるなど、「持続可能な観光」を目指した取り組みが進められている。

そうした中で、新たな観光地を発掘して観光庁は「オーバーツーリズムの未然防止・抑制による持続可能な観光推進事業」の中で、「需要の分散・標準化」を進めている。これは、夜間拝観の推奨や観覧時間の延長といった時間的な分散とともに、観光地の混雑量の可視化といった場所的の分散でもある。一方で、この方向でのオー

バーツリズム問題への対策は、不十分といえる。JNTO（日本政府観光局）の推計によると、日本へのインバウンドは2024年の訪日外客数は約3686万人で年間に3600万人をはじめて突破し、過去最高となった。さらに、2025年上半期の累計は約2151万人で、2024年同期を370万人以上上回り、過去最速となる6か月で2,000万人を突破した。こうした状況に対して、時間やローカルな地域での分散は難しく、新たな観光地の開発が望まれるところだろう。

橋本・山下（2024）は、地域の史跡や文化遺産を教材として取り上げる例は多く見られる一方で、「地域再生」という視点で取り上げられる例が少ないことを指摘し、過去にその地域が繁栄していたことや歴史的な舞台として意義のある地域だということを知ることで、自分たちの住む地域への誇りや地域を見直す契機となることを考察した。そして、地域の歴史を掘り起こして教材化した例として、京都府の亀岡市を事例とした歴史学習を展開している。さらに、授業実践から、授業後の感想を通して学習者が地域の歴史的重要性を実感したことを報告している。

このように、地域の歴史や文化、景観は近年、観光資源として再評価されている。住民にとっては意外な場所への観光が進み、風景のように取り上げられていた地域の神社や墓が、有名になったコンテンツを境に急に観光地として着目されたり（コンテンツ・ツーリズム）、負の象徴として取り上げられたり（ダーク・ツーリズム）する例も見られる。こうした事例を踏まえて、発達段階や学習内容に沿って観光資源として地域の歴史・文化的価値を再発見する学習が必要と考える。ここまでの考察をまとめると、以下の図になる（図3）。

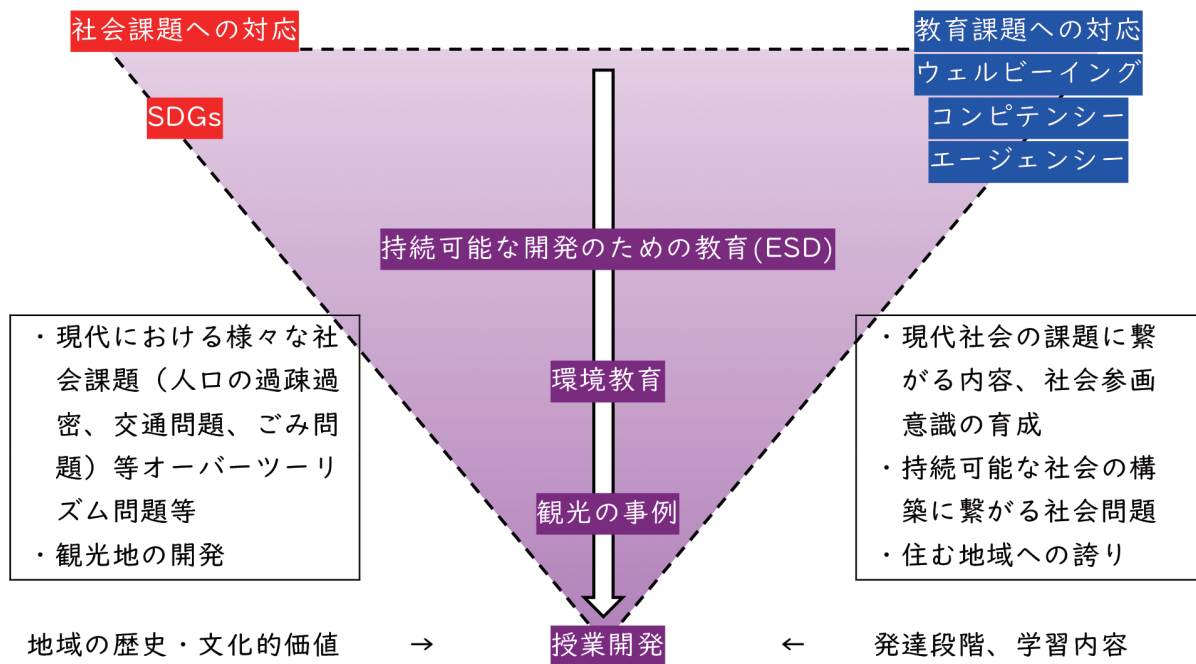


図3 観光を視点とした環境教育授業開発のイメージ

1.5 本研究の目的

本研究は、社会課題と教育課題に対応した環境教育授業開発として位置付けられる。社会課題としてグローバルでの共通目標であるSDGsと持続可能な社会の担い手を育てる教育の方向性としてOECDが示したラーニング・コンパスに対応する持続可能な開発のための教育（ESD）が位置付いている。そして、現代における社会課題として人口・交通・ごみといった都市問題、観光に焦点を当てるとオーバーツリズム問題などが挙げられ、地域の歴史・文化的価値を見直すことで観光地開発を進め、解決に向かう道筋がある。教育においては、現代社会の課題に繋がる内容が求められ、社会参画意識の育成に向けた地域教材の開発、とりわけ持続可能な社会構築に繋がる社会問題への学習から、地域への誇りなどをもてる教育が求められている。もちろん、その際には学習者の発達段階や学習内容の系統性に基づいた教育が前提となる。そうした課題に対して、近世の都市を題材とし

た環境教育授業開発を通して応えたい。

観光資源の一つとして時にローカル（一時代的な）ものが注目されがちである。例えば、観光地で戦国時代の装備を着用できる体験、幕末の志士に着目した施設巡り、平安時代の文学を基にした観光地巡りなど、古代から近代まで幅広い観光資源が日本には存在する。その中で、近世、とりわけ江戸時代への注目は薄い。これは戦国時代や幕末といった武力等による時代の転換、平安時代における身分・立場のある中での特有の文学といった現代との価値観の相違が分かりやすい事例が観光地になっていることが理由として考えられる。しかし、江戸時代は都市構造、景観、災害対応など、現代との接続点が多くみられるという点で観光資源でもありながら教育的活用も可能、歴史的分野でありながらその視点は時期、災害、景観といった地理的分野にも繋がる。こうした都市構造は地域によって違いも大きく、観光資源として再考の価値があると考えられる。そこで、本稿では、近世都市の歴史的景観を題材に、観光の視点から環境教育との接点を明らかにし、授業開発という形で示す。

Ⅱ. 江戸時代の都市と観光の教材事例—伊勢国宇治・山田—

本章では、環境教育の教材開発に向けて、伊勢国宇治・山田（現、三重県伊勢市）の事例を示す。江戸時代の都市と観光に関する視点から論点を整理し、環境教育の教材としての方途を探る。

2.1 江戸時代における都市と観光

近世、殊に江戸時代は、統一政権の樹立による平和の到来、新田開発等による全国的な生産性の向上により、長く安定がもたらされた時代であり、その中で、多くの地域において、現代まで繋がる「まち」の原型が形成された。いまひとつ例を挙げるならば、現代の日本の首都である東京は、天正18年（1590）8月1日、徳川家康が豊臣秀吉の命で入府し、以来、徳川幕府の政庁たる江戸城を中心に城下町として発達した。

一方、平和な時代は都市に住まう人だけでなく、都市を行き来する人々にも変化を及ぼした。高橋（2016）では、戦乱と自然災害が人々の自発的な旅を困難にせしめた古代・中世と比して、近世には一般民衆の自発的な旅が広範に可能になった、旅の「大衆化」の要因として、①平和な時代の到来、②交通環境の向上、③経済の安定、④村落共同体の成立、⑤宗教秩序の確立、⑥文字社会の発展の6点を指摘する。このような旅が「大衆化」した時代における歴史を考える時、青柳（2002）が指摘するように、旅行者を受け入れる地域側の社会構造という視角も重要となる。旅文化が庶民にまで広がる中で、それを地域社会は如何にして受け入れて、存立していたのか、都市の構造・経営・展開にも視線を向ける必要がある。

また、近世における旅は、すぐれて信仰的側面と表裏一体であった。そして、それらは四国遍路や、西国三十三ヶ所巡礼など、現代における観光においても人気を博すプランとなっているが、中でも江戸時代多くの人が憧れた旅先といえば、伊勢参詣であった。伊勢には既に中世後期から参詣者が多く訪れていたが、伊勢参詣は平和がもたらされ安定的な民衆の旅が可能となる江戸時代に隆盛を迎える。江戸時代における伊勢には、後述する御師（おんし）の活動や、各地における伊勢講の発達もあり、また、西日本と東日本の中間地点に位置するという立地もあいまって、全国から多数の参詣者が訪れた。『伊勢市史』第3巻によれば、18世紀代の参宮者数は20万人から40万人程度で推移していたと想定される。また「御蔭参り」と呼ばれる突発的集団参宮も複数回起こっており、最大規模とされる文政13年（1830）には500万人もの参詣客が集まったとされている。そのような中、伊勢神宮鳥居前町として発展してきた、宇治（内宮鳥居前町）と山田（外宮鳥居前町）は、この膨大な参宮客を受け入れ、あるいはもてなすために、観光都市としての側面を備え発達していく。このような都市の発展を基礎として、現代まで鳥居前町としての都市景観が脈々と受け継がれている側面もあるが、実際は様々な影響を受けて景観を変化させている側面も多い。このように、過去から継承されている景観から歴史を学ぶだけでなく、変化の側面を発見することも、その都市が経験してきた歴史を学ぶ上でひとつの気づきとなる。

加えて、江戸時代における旅を取り上げることは、史料の教材活用の側面からも利点がある。江戸時代の旅文化の醸成は出版文化の発達と共にあり、各地の案内記や名所図会が出版され、広く列島各地に流布した。案内記や名所図会は、史料のデジタル公開が進む中で、国文学研究資料館の国書データベースや、国立国会図書館のデ

デジタルコレクションで比較的容易に閲覧可能であり、教材へも活用しやすい。さらに、旅に出た多くの人々は道中記と呼ばれる旅の記録を書き残した。これは、自身の旅の記録としての意味合いだけでなく、子孫や同じ講の人々が今後旅に出る際の参考資料としての意味も持っていた。これらの道中記は全国各地に残り、自治体史編纂に伴って、当該自治体の資料編に記載され、刊行されている場合もある。このような史料の教材活用の容易さからしても、江戸時代の旅と都市の問題を教材化する利点となろう。

2.2 宇治・山田の都市と江戸時代の伊勢参詣

次に、環境教育の素材として、江戸時代に多くの参詣客を受け入れた伊勢国宇治・山田（現、三重県伊勢市）の事例を示す。以下、特に断らない場合、近世の宇治・山田の歴史については『伊勢市史』第3巻、ならびに塚本(2014)の成果に基づく。

伊勢神宮鳥居前町である宇治（内宮鳥居前町）と、山田（外宮鳥居前町）は、豊臣秀吉の朱印状発給によって、検地が免除されると共に、中世以来、都市の自治を担っていた「惣」に自治権が認められる。その結果、江戸時代においては、幕府直轄の遠国奉行である山田奉行の影響下にありつつも、宇治では宇治会合、山田では山田三方という自治組織が確立し、住民自治のもと町政が行われていた。この宇治会合・山田三方において自治の担い手となる階層も含め、宇治・山田の住人は御師（おんし）と呼ばれる宗教者を核に構成されていた。彼等は全国の様々な身分階層の人々と師檀関係を結び、毎年御祓大麻や土産物を配り、檀家のために祈禱を行う代わりに、初穂料などの米銭を受けていた。そして、檀家が伊勢神宮へ参詣する折には、宿や食事を提供したり、御師宅で神楽をあげて神宮との間を取り次いだりするなど、参詣客を世話し出迎える役目を果たしていた。

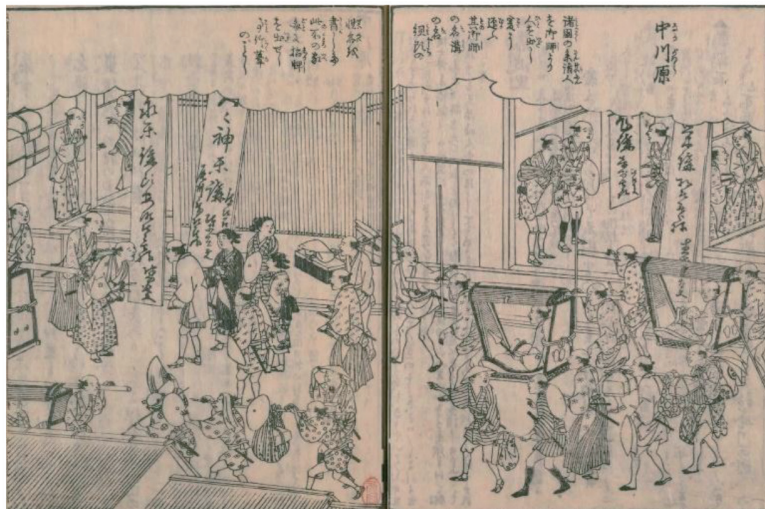


図4 『伊勢参宮名所図会』巻四（国立国会図書館デジタルコレクション）「中川原」

このような御師たちの活動により、全国から参詣客を招き入れ、受け入れる構造が宇治・山田には出来上がっていた。ここでは参詣客を迎える空間として、中河原と間の山に着目したい。

宇治・山田を訪れる参詣客の多くは、参宮街道を南下して、宮川を越えて山田の町に入る。当時の宮川には橋はなく、渡しから船を用いて宮川を渡り、山田の入り口である中河原にたどり着く。この渡し船は無料であり、両会合の管轄する住民たちに費用が割りかけられていた。現代の中河原周辺と、そこから続く伊勢街道は、古い道の名残を残しつつも住宅が並ぶのみであるが、『伊勢参宮図会』(図4)には、多くの人々が往来する姿が描かれ、江戸時代には茶屋や旅籠屋が立ち並んでいた様子が覗える。

宇治・山田を訪れる参詣客の多くは、参宮街道を南下して、宮川を越えて山田の町に入る。当時の宮川には橋はなく、渡しから船を用いて宮川を渡り、山田の入り口である中河原にたどり着く。この渡し船は無料であり、両会合の管轄する住民たちに費用が割りかけられていた。現代の中河原周辺と、そこから続く伊勢街道は、古い道の名残を残しつつも住宅が並ぶのみであるが、『伊勢参宮図会』(図4)には、多くの人々が往来する姿が描かれ、江戸時代には茶屋や旅籠屋が立ち並んでいた様子が覗える。



図5 『伊勢参宮名所図会』巻四（国立国会図書館デジタルコレクション）「間の山」

加えて、中河原は御師の手代たちが参詣客を出迎える場所として認識されていた。参詣客はこの茶屋で国元の檀那場を持つ御師を仲介され、御師の手代の手引きによって山田の町に入っていく。

また、山田から宇治へと向かう街道の間には、間の山・古市と呼ばれる参詣客に人気の歓楽街があった。十返舎一九『東海道中膝栗毛』などの文学作品にも詳しい描写が見える。『伊勢参宮名所図会』の間の山の図(図5)には、参詣客が多数行き交う中、小屋かけをして三味線を弾く「お杉・お玉」と呼ばれる名物の芸能者や、ささらという楽器を用いて芸をする親子の姿が見える。ここに見える芸能者たちは牛谷・拝田と呼ばれる被差別民集団に属していたと考えられている。また参詣客がこのような芸能者に対して銭を投げている様子も伺える。これは蒔銭と呼ばれる行為で、本源的には参詣客の罪障を清める「祓い」の一種とされる。実は、これらの蒔銭が参宮客から御師への支払いの中に含まれており、さらに御師と牛谷・拝田の集団が組織的な関係を持っていたことが指摘される。間の山の空間は、参詣客をもてなす接客システムとしてつくられたものであった。

以上のように、宇治・山田の町では、中核的な住人である御師をはじめとして、被差別民集団も含めて参詣客を迎える構造を形成し、江戸時代には観光都市としての性格を帯びていた。一方で、このような中川原や間の山の賑わいは、現代の伊勢においては確認できない。如上の問題は近世から近代への変化の中で別に検討されるべき課題であるが、今一つ観光という視点からその要因を想起すれば、交通の変化という側面が大きいと考えられよう。現代における内宮・外宮周辺の観光地は、鉄道やバスの公共交通機関の発展・利用により、駅周辺と両神宮門前の外宮参道やおはらい町をメインに整備されているが、江戸時代には徒歩による移動が主となっていたため、街道沿に都市や参詣客を出迎える空間が展開していた。このような景観の変化の側面も含めて地域の歴史を学んでいく重要な視角となろう。

2.3 景観の変化と災害・神仏分離

景観の変化の側面は、突発的に発生する災害や、時の政策に規定される側面も多くあった。江戸時代の都市社会において共通的に懸念される災害の一つとして火災があった。木造家屋が密集する江戸時代の都市では、火の手が上がればたちまち延焼し、広範囲が焼き尽くされる危険性を帯びていた。それ故、火災対応が近世都市における重要課題として認識されていた。宇治・山田でも防火体制が敷かれ、寛文12年(1672)には町々に消化用具として手桶、梯子、幟が常置された。宝永3年(1706)には山田奉行所より近在の村々へ消化道具が渡され、火消人足の出勤が命じられた。また、山田の被差別民集団である拝田に対しても自治組織である山田三方から、町火消の補佐として出火時に駆け付けることが命じられており、都市住人だけでなく、近隣村落や被差別民集団も都市火災の消化に関わっていたことがわかる。

加えて、宗教都市であった宇治・山田の場合、伊勢神宮への延焼を防ぐという、他の都市とは異なる課題も抱えていた。このような伊勢神宮への延焼を防ぐ手段として、山田においては寛文10年(1670)の「なたや火事」と呼ばれる大火災を契機に、山田奉行の政策により、宮域の近くに寺院が立ち並ぶことを難じて144か寺が移転され、火除地が確保された。しかし、外宮の西に位置し、この時には類焼しなかった世義寺が、現在の伊勢市岡本の地に移転させられるなど、早くから山田奉行による神仏分離の政策的動向が見えると指摘される。

近代における神仏分離以前、全国的に神仏習合の様相が見られ、神道的要素と仏教的要素が併存していることも多かった。その様相は伊勢神宮を擁する宇治・山田においても同様で、中世以来の神宮寺や法楽舎が近世にも引き継がれ、宇治には寛永20年(1643)時点で57か寺、山田には寛文10年(1670)時点227か寺の寺院があった。一方で、住人の中核も伊勢神宮と関わる宗教者が多かったため、先に見たような山田奉行主導による神仏分離の動向や、神と仏が明確に区分けされた認識も窺えるが、神宮側としては積極的に分離を推進することはなく、江戸時代中には必要な時分に仏教的要素を隠すなどして仏教的要素と並存していた。しかし、幕末・維新期には全国的な神仏分離の影響を受け、近世以前の景観から大きく姿を変える。河野(2016)によれば、宇治・山田では地域全体として神仏分離が進められ、多くの寺院が廃されたことが指摘される。このような神仏関係の変化は、宇治・山田だけでなく、全国各地において景観の変化を及ぼしており、地域の変化と全国的な政教関係を繋ぐ一つの観点となろう。

Ⅲ. 近世の都市を題材とした環境教育授業開発

3.1 指導案

①単元・教材について

以上から、中学校社会科の環境教育授業開発を行う。中学校社会科歴史的分野では、近世の歴史の中で、「産業の発達と町人文化」に関わる内容がある。ここでは、産業や交通の発達、教育の普及と文化の広がりなどから都市を中心に文化が形成されたことや各地方の生活文化が生まれたことを学習する。一方で本指導計画は、先述の一般民衆の自発的な旅により、伊勢参詣などが行われた結果、都市が形成されたり観光資源が生み出されたりする事象を取り扱う。

②単元・教材名

単元「伊勢参詣から見える近世の都市」

③単元目標

近世の都市の形成について、諸資料から歴史に関する様々な情報を効果的に調べまとめるとともに、観光や人々の身分などを時期や年代、推移、比較、相互の関連などに着目して多面的・多角的に考察し、近世の都市で見られる課題を主体的に追究、解決しようとする態度を養う。

④指導計画

時	ねらいや主な学習活動
1	<p>○学習課題を設定する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・旅や観光についてのイメージを交流する。 ・江戸時代には伊勢神宮への「観光」が流行したことを資料から知る。 ・戦乱と自然災害が旅を困難にした古代・中世と比較し、近世は一般民衆の自発的な旅が広範になったことを理解する。 ・『伊勢参宮図会』から多くの人が往来し、茶屋や旅籠屋が立ち並んでいた様子を読み取る。 ・旅行者が増加するにつれ、旅行者を受け入れる地域側の社会構造にも着目し、学習課題を設定する。 <p style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;">【学習問題】なぜ近世は「観光」を通して都市が形成されたのだろうか？</p>
2	<p>○観光都市に向けた都市形成を理解する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・18世紀代の参宮者数は20万人から40万人程度で推移し、「御蔭参り」と呼ばれる突発的集団参宮も複数回行われたことから、観光都市としての側面を備え発達してきたことを理解する。 ・宇治・山田の住人は御師と呼ばれる宗教者を核に構成され、檀家の宿や食事を提供したり、御師宅で神楽をあげて神宮との間を取り次いだりするなど、参詣客を世話し出迎える役目を担っていたことを資料から読み取り、全国から参詣客を招き入れ、受け入れる構造が出来上がっていたことを理解する。 ・各地の案内記や名所図会が出版され、観光を促す工夫が行われていたことを読み取る。 ・観光客の倍増に対して、出店や宿・食事の提供といった変化が景観から読み取れ、観光都市として都市形成を進めていったことを理解する。
3	<p>○観光都市の構造を理解する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・『伊勢参宮名所図会』から、「お杉・お玉」と呼ばれる名物的芸能者やささらという楽器を用いて芸をする人々が被差別民集団に属していたことを読み取る。

- ・被差別民集団も含めて参詣客を迎える構造を形成し、江戸時代から観光都市としての性格を帯びてきたことを理解する。
- ・現代の都市の様子との比較から、現代における内宮・外宮周辺の観光地は、鉄道やバスの公共交通機関の発展・利用により、駅周辺と両神宮門前の外宮参道やおはらい町をメインに整備されているが、江戸時代には徒歩による移動が主となっていたため、街道沿に都市や参詣客を出迎える空間が展開していたという交通の変化の側面で歴史的景観に影響を与えることをまとめる。

※本指導計画は、近世の身分制や産業を実施した後に行う授業を想定しており、便宜上時数を付けているが、単元の中の一部を抜粋している。

3.2 授業開発の意義

本指導計画は3時間構成である。まず、旅や観光についてのイメージを授業者と学習者で共有する。江戸時代の観光の一例として、伊勢神宮への参詣が流行となったことを踏まえ、古代・中世と比較し近世の時代における観光や旅が広がっていったことを理解する。その事例として、『伊勢参宮図会』を取りあげ、観光を境にした都市形成に着目し、学習課題を設定する。次に、観光都市の形成に向けてどのような取り組みが都市で行われていたかを学習する。参宮者数の推移を読み取り、御師と呼ばれる宗教者を中心に観光客を対応するホストが存在していたことを捉える。観光客などの観光を行う主体と受け入れる側の観光客体が存在することで、伊勢が観光都市として形成されていったことを理解する。最後に、伊勢の観光客体に着目し、被差別集団に属していた芸能者やささらが観光地にいることを踏まえ、被差別集団を含めて江戸時代から観光都市として発展していたことを理解する。そして、現代の伊勢の様子との比較から、交通の視点を踏まえて歴史的景観として近世の都市である伊勢を捉える。

現代における社会課題として観光における都市の変化といった都市問題や部落差別などの格差に関する問題、教育課題として現代社会の課題に繋がる内容であり、社会参画意識の育成に繋がる地域教材、持続可能な社会構築に繋がる社会問題への学習といえる。近世の都市を題材として、観光の視点から学ぶ環境教育を通して、社会課題と教育課題の双方に応えるESDの一事例であることを強調したい。

IV. 成果と今後の展望

本研究は、社会課題と教育課題に対応した環境教育授業開発として位置付け、近世の都市を題材とした授業開発を示した。近世の都市である伊勢を観光資源としての歴史的景観と捉え、観光の発展と連動する形で近世の都市が形成・発展していく授業開発を行った。

本研究の成果は、二つ挙げられる。一つは、社会課題と教育課題からESDや環境教育、観光を取りあげた教育の位置付けを明確にしたことである。現代的な社会課題と教育課題に対してESDが対応し、そこに位置付く環境教育について観光を例にすることで授業を開発した。二つは、歴史的景観を観光資源として教材化したことである。観光資源として歴史・文化的施設や都市を事例にする場合は多い。一方で近世の都市を観光資源として活用した事例は少ない。近世の都市は、海や山といった観光地に活用可能な自然環境、観光用に建設されたテーマパーク等がない地域にも観光地になる可能性を拓く。今後は、さらなる地域の教材開発を進める一方で、実践を通じた学習者の変容を見取る必要がある。

付記

本稿は、金子が大学院連合教職実践研究科で行った研究をもとに、西川と単元開発に取り組んだものである。主にⅡを西川が、それ以外の箇所を金子が担当しているが、全体構成は二人が共同で行っている。

引用・参考文献

- 青柳周一（2002）『富嶽旅百景—観光地域史の試み—』角川書店。
- 橋本祥夫・山下正己（2022）「「地域再生」を意図した小学校歴史学習の開発—ふるさと学習「かめおか学」亀山城プランを事例に—」『教育実践方法学研究』7巻1号, pp.59-71.
- 伊勢市編（2013）『伊勢市史 第3巻近世編』伊勢市役所発行。
- 『伊勢参官名所図会』寛政9年（1797）刊, 国立国会図書館デジタルコレクション, 請求記号：特1-274
<https://dl.ndl.go.jp/pid/2563508>（2025年10月最終閲覧）
- JNTO（日本政府観光局）「訪日外客数（2024年12月および年間推計値）」
https://www.jnto.go.jp/news/press/20250115_monthly.html
- 金子遥（2021）「メタ認知による抽象化の社会科授業開発—「日本の選挙制度」を例に—」『京都教育大学教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要』3, pp.227-236.
- 金子遥・田中曜次（2022）「環境を視点とした地域教材の開発—小中高の関連を踏まえた地域教材授業開発—」京都教育大学 環境教育研究年報, 30, pp.41-50.
- 金子遥・東俊克（2023）「メタ認知を軸とした社会科の「指導・評価」モデルの開発：中学校社会科「関東地方」を例に」京都教育大学 環境教育研究年報, 31, pp.99-108.
- 金子遥・東俊克（2024）「中学生の問いづくりとその探究プロセス：中学校社会科を事例に」京都教育大学 環境教育研究年報, 32, pp.29-36.
- 環境省「平成14年度 環境の状況に関する年次報告」『環境白書』平成15年6月。
- 観光庁・UNWTO駐日事務所「日本版持続可能な観光ガイドライン（JSTS-D）」2020年6月。
- 河野訓（2016）「伊勢における神仏分離」ジョン・グリーン編『変容する聖地 伊勢』思文閣出版。
国書データベース <https://kokusho.nijl.ac.jp/>（国文学研究資料館ホームページ）
国立国会図書館デジタルコレクション（<https://dl.ndl.go.jp/>）
- United Nations「The Sustainable Development Goals Report 2025」
- 中央教育審議会「今後の教育課程，学習指導及び学習評価等の在り方に関する有識者検討会（第8回）資料3-1」令和5年10月20日。
- 中央教育審議会 教育課程部会「【資料6】社会・地理歴史・公民WGに関する現状・課題と検討事項」社会・地理歴史・公民ワーキング（第1回）令和7年（2025年）9月26日。
- 文部科学省「幼稚園教育要領解説」平成30年2月。
- 文部科学省「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 社会編」平成29年7月。
- 文部科学省「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 社会編」平成29年7月。
- 文部科学省「高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 地理歴史編」平成30年7月。
- 文部科学省HP「持続可能な開発のための教育（ESD：Education for Sustainable Development）」（2025年10月最終閲覧）
- 白井俊（2020）『OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来—エージェンシー，資質・能力とカリキュラム—』ミネルヴァ書房。
- 高橋陽一（2016）『近世旅行史の研究—信仰・観光の旅と旅先地域・温泉—』清文堂出版。
- 塚本明（2014）『近世伊勢神宮領の触穢観念と被差別民』清文堂出版。
- OECD『Teaching Compass: Reimagining Teachers as Agents of Curriculum Change』『OECE Education Policy Perspectives No.123』（2025年5月30日発表）